



話題の本棚

ジョセフ・ヒース著『資本主義が嫌いな人のための経済学〔新版〕』

細見和之著『〈最後のユダヤ人〉ホロコースト以降の文学と思想』

特集／食

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ.

京大生協

CO-OP 綴葉編集委員会

資本主義は正義？ 悪？

資本主義が嫌いな人のための経済学〔新版〕

ジョセフ・ヒース著

栗原百代訳

ハヤカワ文庫NF



「資本主義は好きですか」と聞かれて堂々と「はい」と答えるのは余程の資産家くらいだろう。大抵の人間はいま現在の資本主義社会に対して何らかの不満を抱いているはずだ。なぜこんなにも国は給料を巻き上げるのか、なぜ格差は是正されないのか。

著者曰く、「人類が取り組んできたあらゆる学問のうち、経済学ほど多くの誤謬が付きまとうものはない」。本書は私たちが陥りがちな、経済にまつわる典型的な誤謬を取り上げるユーモアに富んだ一冊だ。ここではいくつかの論点を紹介したい。

右派（保守、リバタリアン）の誤謬

右派は自由市場を信奉し過ぎていて、「神の見えざる手」という有名な表現があるが、市場に対して政府が介入することに対して右派は概して否定的だ。これに対して左派は格差の拡大を問題として市場への介入を正当化するが、これは問題の一面に過ぎない。そもそも、完全に自由な取引に任せた市場というのは必ず「失敗」するのだ。だからこそ、市場が健全に機能するために政府の介入が存在する。右派は大抵、このような市場が機能するための政府の介入（破産保護や有限責任など）には目を瞑り、格差を是正するための介入にはばかり苦言を呈する。右派による小さな政府の要求は「金持

ちに益する措置を続け、ほかは全て排せよ」という催促である。

左派（革新、リベラル）の誤信

左派の最も重要な経済的関心の一つは格差の軽減だろう。ただ、これを行うのは存外難しい。例えば、貧しい生産者のために行われる取り組みとしてフェアトレードがある。これ自体は問題ではないしかし、公正な取引を目指して市場価値よりも高い値段を設定して裕福な国の消費者に貧しい国の商品を買わせる、といった仕組みを作ってしまうと大失敗だ。高い値段のせいで商品の生産量は増え続け、市場価値は下落し続ける。需要と供給のバランスは崩壊し、過剰に生産された商品は廃棄を余儀なくされる。本書ではコーヒー豆が例として挙げられるが、こうした悪いフェアトレードの広告文句はこうだ——「あなたの買う一ポンドのコーヒー豆が、もう一ポンドの海へ投げ捨てられるコーヒー豆になる！」。

結局のところ、私たちが否応なく巻き込まれている現代の市場経済やそれを調整するシステムはなんともよくできており、経済学の基礎的な知識無くしてその是非を判断するのはかなり危険だ。本書は文庫版化された際に「ポピュリズムの時代に」と題された序文が付されている。ポピュリストたちの特徴の一つは、人々の印象や直観に強く訴えかけることだ。難しいことは考えなくてもいい、小難しい理論もいらない。だって、「あいづら」が得をしているのは明らかじゃないか？——本書で提示される直観的認知の危うさ、劇的な解決策など存在しないこと、それは、あらゆる場面で我々が肝に銘じておくべきことだろう。とりわけ経済においては。（荒砥）

（四九六頁 税込一六五〇円 5月刊）

アウシュヴィッツ以後、それでも言葉を紡ぎ続ける

最後のユダヤ人

ホロコースト以降の

文学と思想

細見和之著

中央公論新社



夜明けの黒いミルクぼくらはそれを晩にのむ
ぼくらはそれを昼にのむ朝にのむぼくらはそれを夜にのむ
ぼくらはのむそして

——言うまでもなく、パウル・ツェランの最も有名な詩「死のフーガ」からの一節である。一九〇二年、ユダヤ系の両親のもとに生まれたツェランは、一九四二年、その両親を強制収容所で殺害される（彼自身も強制労働に従事する日々を送っていた）。そして彼はその痛ましい経験に身を切り裂かれつつ、この詩を紡ぎ、「夜明けの黒いミルク」という不穏なイメージを私たちに残したのだった。

二〇世紀を代表するこの詩人——彼はセーヌ川に身を投じてこの世を去った——をめぐって、本書の著者はこう語る。アドルフのあまりに有名な言葉「アウシュヴィッツのあとで詩を書くことは野蛮である」に倣って言えば、ツェランはその逆に、アウシュヴィッツのあとで詩を書かないことは野蛮である、あるいはアウシュヴィッツのあとだからこそ詩を書かねばならぬと考えた詩人である。

そして本書はそうにして、アウシュヴィッツ以後、それでもなお言葉を紡ぎ続けたユダヤ系の作家や思想家に光を当て、その生

涯とテクストを精緻に読み解いた一冊である。フリーモ・レーヴィ、エリ・ヴィーゼル、パウル・ツェラン、ハンナ・アーレント、エマニュエル・レーヴィナス……。彼ら／彼女らの「ホロコースト以降の文学と思想」はいかなる苦難の末に生み出されたものだったのか。

ドイツ思想を専門とする著者ゆえか、私がとりわけ鋭い問題提起を感じたのは、アーレントとレーヴィナスの章だった。そこで何よりも強調されるのは、二人の思想とホロコーストの不可分性である。

著者は言う——「昨今のアーレント研究が、おそらくはアーレントの思想の普遍性を説くために、ホロコーストという歴史的事実から遊離しつつあるようにも私には感じられる」。あるいは「現在の日本におけるレーヴィナス研究にはめざましいものがあるのだが、そこにはレーヴィナスの思想からホロコーストとの関連をできるだけ差し引こうとする傾向が見られるように私には感じられる」。

たとえばアーレント。近年の研究状況を見ると、まず目に付くのは「アーレントを哲学的に読む、現象学的に読む」といった方向性のものであり、たしかにそこにテクストの緻密な読解はあるものの、当時の時代状況へのまなざしは希薄である。しかし彼女もこの世界に生きたひとりの人間であった以上、その思想からホロコーストを抜きにすることはできないという主張に、私は頷かざるを得ない。

昨年は、クロード・ランズマン監督の記念碑的なドキュメンタリー映画「ショアー」の日本公開から三〇年の節目の年だった。ガザで虐殺が続くなか、ショアー（ホロコースト）を今もう一度考え直すということ。その意義を本書は示しているのではないか。（はや）

（三二〇頁 税込三三二〇円） 3月刊

きのう何食べた？

よしながふみ著
講談社

料理上手で几帳面な弁護士・シロさんとその恋人の美容師・ケンジ。男2人の同居生活が描かれるこの物語の最大の魅力は、詳細な調理シーンとともにその生活が描かれること。知名度も高い本作だが、今回はこの作品とともに流れた時間についての議論から始めよう。

2007年の連載開始から20年。美男子・シロさんも流石にシワが目立つようになり、第23巻では還暦を迎える。息子が同性愛者であることを認められず、折り合いに苦労したシロさんの母親も第24巻で天寿を全うした。食卓を囲んだ歳月の分だけ、別れの数も増えていく。

そして現実の時間について。同性愛をめぐる社会状況はこの20年で少しずつ変わってきた。が、日本では未だに同性婚は認められていない。それは即ち、愛し合う2人が法律上は家族ではない他人であることを意味する。例えば事故などで緊急の手術が必要になったとき、サインを求められるのは家族だ——“俺達には時間がないんだよ（…）法整備まで何年かかるか分からないんだ”。第25巻にて、シロさんはケンジに養子縁組届を差し出す。まだ受理されることのない婚姻届とともに。

社会は進む。おそらく少しでもマシな方へ。だが、それは当事者にとっては「いつになるかわからない」未来を待ち続ける苦しみでもある。本作から浮かび上がる時間は、不意に訪れる別れも、ままならない苦しい現実も、時折やってくる喜びも、全て引っくるめて私たちの生活が続いていくことを教えてくれる。「きのう何食べた？」が日常という偶然性の肯定だとしたら、この愛すべき作品から広がる「あした何食べる？」は、未来をよりよく生きるための希望の言葉なのだ。（浅煎り）

（既巻25巻 第1巻 税込792円）

特集

食

酷暑の時期がやってきました。食欲はいかがでしょうか。くれぐれも夏バテは起こさぬよう、滋養に富んだものを摂られますように。

私たちは日々、何かを食べないと生きていけません。楽しい時も、悲しい時も、腹は空くのです。

食えることは生きること——どうぞ、グルメな選書を召し上げ。（浅煎り）

ロイヤルホストで夜まで語りたい

柚木麻子／朝井リョウ他著
朝日新聞出版社

ロイヤルホスト——それは街中の宮殿、卓上の宝石、人々の夢。このファミリーレストランを知ってしまった大人たちの熱い思いが詰まっているのが、本エッセイアンソロジーである。



著者の一人、小説家・柚木麻子はロイヤルホストをこう表現する——この国の「ロマンスのインフラ」最後の砦だ、と。例えば、アルフォートのチョコレート部分に描かれた精巧な船。例えば、商業施設の中に流れる川とそれを眺める天使の像。「当たり前に万人に開かれているところで繰り出される高いスキルとサービス。溢れ出る美意識、魂のエLEGANCE、贅沢さ、あとほんのちょっぴりのおかしみ」。無くても死にはしないだろう「ロマンス」と生きる基盤たる「インフラ」のマリアージュ。すると、私たちの生きる時間にこの束の間の夢がなくてはならないものに思えてくる。

「人生にロイヤルは不可欠である」。そう綴るのはノンフィクション作家の村瀬秀信。やはり私たちには必要なのだ、ロイヤルが！『『ロイヤル』。人はその響きに畏敬の念を抱く。その名を冠するだけでミルクティーですら高貴さを増す、ちょっとした贅沢』。このファミレスは名前からも私たちに夢をみせる。著者らが挙げる好きなメニューを見てみると、パラダイストロピカルアイ스티ー、コスモドリア、ギャザリング・プラッター……。そこにあるのは非日常のことば。ときめきは食べる前から提供されているのである。

様々な分野の文筆家たちが一つのファミレスについて渾身の筆を振るう贅沢一冊。本書もまた私たちの食に、人生に、ロイヤルをひと匙加えてくれる存在と言える。食とは取り巻く全てを味わうものだから。（ひるね）

（208頁 税込1760円）

いつかティファニーで朝食を

マキヒロチ著
新潮社

都内に住む28歳の麻里子は、7年付き合った彼氏との別れを決断する。妥協の積み重ねの中で失われた自分を取り戻し、再び「自分と出会う」ために。



麻里子にとって朝食とは、本来自分の理想を表現する場である。朝食の充実度は人生の充実度。しかし元彼氏との同棲の中で、それは朝昼兼用の間に合わせの食事になっていた。自分の理想を諦めた既製品だけの朝食は、理想の自己表現の場どころか、長年の妥協の象徴だった。実家で母が作る食卓に乗り切らないほどの豊かな朝食。早朝、ニューヨーク5番街に構えるティファニーのショーケースを覗き込んで食べるホリーの朝食。彼女らのように自分が最高だと思う朝食を実践するために、麻里子は美味しい朝食のお店を巡り始めることから始める。

麻里子ほどでなくとも、朝食を食べることは自分自身の不足を補う時間になる。体に足りないものを与えるだけでなく、瘦せてしまった心に栄養を与える時間。自分を大切に扱っているのだという満足感を補う時間。自分を顧み劣る時間を省いた既製品の食事は、効率を得る代わりに充足感を失ってしまっているのかもしれない。

第1巻の表紙では、麻里子が映画『ティファニーで朝食を』のオーディリー・ヘプバーンと同じ黒いドレスに真珠のネックレスを身につけている。現場仕事のおじちゃんたちに囲まれ、シャケ定食を口いっぱい頼張って。そしてほっぺにごはん粒をつけて、きょとんとした顔でこちらを見ている。その何とも言えないアンバランスさが、彼女だけの理想をチャームに描き出す。

（時間）

（全14巻 第1巻 税込607円）

Cooking for Geeks第2版

——料理の科学と実践レシピ

ジェフ・ポッター著 水原文訳
オライリー・ジャパン

自炊が好きだ。時間と手間ひま、そして少しのお金さえかければ、食べたいと思ったものが目の前で出来る上がる。だがうまくいかなかったときは、いろんな疑問が湧く。レシピ通りに作っているはずなのに、しょっぱかったり、食感が微妙だったり。いったい何が起きているのか。こうした疑問に答えるのが本書だ。

Geeks とは、何かに異様に熱中する人のことであり、「なぜそうなるのか」を知らずにいられない気質の持ち主を指す。つまり本書は、料理を手順としてではなく、原理から理解したい人間のための本である。著者によれば、台所に立つ人はすでに物理学者であり化学者である。チョコチップクッキーを焼くだけで、タンパク質が変性し、水分が蒸発し、メイラード反応が表面を褐色に染める。

章構成は「味と匂い」「時間と温度」「空気と水」と、料理を構成する要素ごとに進む。読んでみると、知っているつもりだったことの内側に、もう一層細かい仕組みがあったと気づかされる。たとえば卵。卵白は単一のタンパク質ではなく、数十種類のタンパク質の混合物で、それぞれ違う温度で変性する。オボトランスフェリンは 61℃前後で固まり始め、卵白タンパク質の半分以上を占めるオボアルブミンは 80℃まで固まらない。この 19℃の幅のなかに、半熟・固まりかけ・しっかり固まる・ゴムのように締まるという複数の状態が詰まっている。温泉卵があの独特の質感になるのも、この温度差そのものが理由だ。

理解すればキッチンでの判断が変わり、気づけば買い物でも楽しくなる。レシピは出発点となり、そこから先は自分で考えられるようになるだろう。

(たいやき)

(490 頁 税込 3740 円)



ロシア文学の食卓

沼野恭子著
ちくま文庫

祇園四条にあるレストランキエフ、北山にあるカフェ・ヨーヅクなど、実はスラブ語圏料理を味わえるお店が京都にいくつか存在する。個人的には、キエフのピロシキは一度食べたら忘れられない。香ばしい生地と、中の具材の肉肉しい味わい。なんとお持ち帰りもできる。

だが、ロシア料理はピロシキのみに非ず。ロシア文学を少しばかり読めば、馴染みのない料理の数々にきっと驚かされるだろう。たとえばゴーゴリ『死せる魂』で、主人公のチチコフが旅籠に着くなり大量の食事を注文する場面。《生地を層状に折り込んだピロシキ(…)とシチー、エンドウを入れた脳味噌料理、キャベツを添えたソーセージ、焼いた去勢雌鶏、キュウリの塩漬、そして申しつけられればすぐに出せる、いつも変わらぬ甘いピロシキ》。あるいは別の家で《シャニシキ、揚げパン、ブリニィ(…)いろいろな具の載っている円形パン》などが食卓に並ぶ。方々の地主を訪ねて回るチチコフの遍歴は、さながら「食道楽紀行」のようだ。この例に限らず、ロシア文学の世界には、豊かな食文化と、食に対するロシア人のこだわりがこれでもかと詰め込まれている。

上述のゴーゴリ、あるいはドストエフスキーからブルガーコフ、ソルジェニツィンなど、ロシア文学の主要作家を網羅的に紹介しながら、作中に登場するロシア料理を子細に説明したのが本書である。文学を足掛かりとした食文化の書であると同時に、食を足掛かりとしたロシア文学の書であるといってもよい。本書を片手にキエフかヨーヅクに行くのもいいし、登場した作品を読んでみるのも最高だ。夏なので、クワスでも飲みながら。

(猫足)

(260 頁 税込 950 円)



異国の味

稲田俊輔著
集英社

日本是世界中の色々な国と比較すると、とてもグルメな国だと思う。毎食異なるものを食べ、様々な味を楽しむ。世界各国の料理が全国で味わえるし、家庭でも調理されている。



そんなグルメな日本であるが、外国料理原理主義者（「アレンジ一切無しに本場そのままで提供してほしい」と考える人）は多くない、と著者は言う。例えば中国・中華料理。日本における中国風料理は、中国で食べられているような本格的な中国料理だけでなく、大衆向け・日本人向けに味が改変された中華料理が多い。町中華などとして人々のあいだで広く親しまれているのは、後者の中華料理であると筆者は指摘する。

また、インド・ネパール料理屋。原理主義者の著者によると、南アジアでは見かけることのない甘いバターチキンカレーは、本場の味ではない。しかし、メニューすべてが日本人に合わせてあるメニューではないと評者は思う。ネパールでは、日本人が想像する「カレー」は食べられていない。毎日毎食ダルバート（豆スープと米、野菜の炒め物）を食べる。日本人に合わせた料理を調理するネパール人シェフは、メニューの端に書かれている豆カレーに故郷の味を投影しているのではないだろうか。

中華料理、フランス料理、ロシア料理など、様々な国の料理に着目し、どのように「日本人の喜ぶ味」として進化を遂げてきたのかを、自らの経験をもとに語るエッセイである本書。評者らが知らない、日本の外国料理文化の歴史が描かれる。著者は原理主義者だが、読むと肯定も否定もできる話ができて、親近感が湧きまくる。

（ブラチ）

（200 頁 税込 1650 円）

カレー移民の謎 日本を制覇する「インネパ」

室橋裕和著 集英社新書

最近、地元のやや寂れたモールにインドカレー店ができたことを街頭の従業員が配っていたビラで知った。インドカレーといえばこれ



を読む読者の半数以上は確実に足を運んだことがあるだろうし、かく言う評者も今まで食べたナンの枚数は覚えていない。しかし、こんなに身近にありながら、僕たちはインドカレー店のことを何も知らないのではなからうか。

ジャーナリストの筆者は、関係者への聞き取りから、日本のインドカレー店——多くがネパール人の経営であることから「インネパ」と通称される——の歴史と現在を詳らかにしている。率直に言うと、日本のインドカレー店の歴史はこの国の移民政策に強く影響された結果なのだ。2000 年代初頭に経営管理ビザの取得が資本金の引き下げによって易化すると、ビッグインジャパンを夢見たネパール人が続々と日本でインドカレー店を起業するように。そのうち、カネのない起業志望のネパール人に資本金を貸し付ける仲介ビジネスが横行し、ネパール人コミュニティ内部で搾取の構造ができあがっていく。入管に怪しまれないために様々な工夫も取られるようになる（街頭でのビラ配りは在留資格の更新を容易にするための対策でもある）。

しかし、昨年 10 月、経営管理ビザの取得に必要な資本金が従来の 500 万円から 3000 万円へ大幅に引き上げられた。ビザの悪用を防ぐためとのことだが、それでは資本金を用意できる仲介ビジネスの権力をさらに助長させるだけで、根本的な問題の解決とはならないだろう。インドカレー店はこれからどうなってしまうのだろうか……チキンティッカマサラを頬張りながら、そう思った。

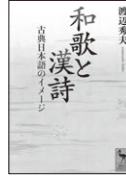
（倉井）

（334 頁 税込 1320 円）

新刊コーナー

和歌と漢詩

古典日本語のイメージ

渡辺秀夫著
講談社学術文庫

雪や霜に見まがう
月光、立秋を告げる
秋風、闇夜に鳴くほ
ととぎす……。本書

は古典詩歌に登場する景物を十九種取り上げ、五つの章に分類し、解説したものだ。

景物の取り上げ方に注目しよう。第二章

「鳥の声と花の香」の中では、春を代表する花である桜と梅が対比され、同じ季節の景物でありながら異なる詩的役割を担っていることが示される。梅は咲く姿が賛美される一方、桜は散る姿に哀惜や無常の感情が託されて、その美しさが讃えられる。落花が「欠落・不在」を表すというのは梅と桜で共通しているが、散る姿に美を見出される桜はさらに「死」とも結びつくというのだ。このような景物同士イメージの棲み分けを、具体例を通して理解できる点が、本書の大きな魅力だ。

また著者は、中国詩から平安期王朝漢詩へ、さらに和歌へと、いかに事物のイメージが取

り込まれたのかを追究する。『万葉集』で恋の激情を象徴していた滝は平安朝以降、中国詩の影響で「銀河の天より落つる」さまや、「布を曝す」さまに喩えられた。和歌においてはもう一段階見立てが発展し、天の川の下流にある滝＝布は、「織女の織り流しかける布」であるという想像も生まれたという。

漢詩から和歌へのイメージの受容は新たな表現を創造する積極的な営みでもあるとする著者の視点があちこちで光り、影響関係にありつつ全く同じ表現を取りはしない和歌と漢詩、両者の特性が浮き出ている。(波見戸)

(三七二頁 税込一七六〇円 5月刊)

キヤクストン

英国印刷の誕生

写本と印刷本の裏事情

高木眞佐子著 晃洋書房

一四七六年、キヤクストンがウェストミンスターに英国初の印刷所を構える



——教科書に書かれるのはたった一文。だがその裏には、キヤクストンという一人の人間の人生とそれを取り巻く社会が広がる。

彼が印刷家に転身したのは五〇歳頃と存外

遅く、本書はそれ以前の冒険商人としてのキヤリアに注目している。バラ戦争の時代にはヨーク派として商工組合の要職に就いた彼だが、一四八五年八月に同派が敗れると、今度はランカスター家傍系の新王朝に重用される動乱の世を渡り歩くこの繊細なバランス感覚は商人時代に培われたものとされ、それは彼の印刷物にも現れているようだ。

特に一四八五年に印刷された『アーサー王の死』原作・マロリー版からの改変——誰が何のために？——については、研究者間で議論が続いている。その一つが、アーサー王の夢の中でドラゴンに倒されるbeast(熊がbeast(イノシシ))に変更された点。当時、イノシシはヨーク家リチャード三世の旗印であった。加えて、奥付には印刷年と「七月末日」の記述。ヘンリー・テューダーがドラゴンの旗印を掲げて進軍したことを踏まえると、このたった二字の改変に「予言」という政治的意図が浮上する。だがあのキヤクストンがそんなことをするだろうか？ 著者は、現存する写本と印刷物の校合、紙の透かし模様や余白に残るかすかな印からテキストの裏側へ迫る。本書は中世英国を舞台にした大河ドラマ、または策謀に揺れる宮廷劇、はたまたミステリともいえる研究書なのである。(ひるね)

(二四八頁 税込四九五〇円 3月刊)

スタインベック短篇集 長くのびた盆地

ジョン・スタインベック著
青山南訳 岩波文庫



「このことをおも
うと喜びがあふれて
くる。なぜかはわか
らないが、ほんとに
小さな細部までが見えてくる。気がつくとも何
度も何度も思いかえして、沈んでいた記
憶からさらに細部を見つけたたび、思い出
が奇妙にあったかい喜びをくれる」。

本書はスタインベックの短編集The Long Valleyの邦訳である。「スタインベック短編集」を題した書籍は複数あるが、収められている作品が微妙に異なっている。本書は原著そのままの邦訳である。ほとんどの短編はスタインベックの他の作品でも描かれるカリフォルニア州北部のサリナス峡谷を舞台としており、登場人物も農民や労働者が主だ。

冒頭に引いたのは「朝めしbreakfast」の書き出しである。あらすじはなんというこのない、ただ単に語り手が行き合った綿摘み労働者の家族と朝食を共にするだけの極めて短い掌編である。だが、読んだ本のことをすっかり忘れてしまう評者（既読の本を初読のつ

もりで読み始め、半分ほど読んでそれと気づくことがよくある）が十年近く前に読んだことをずっと覚えていたほど、この作品の朝食の描写は妙に印象に残っている。筋も描写も素朴で簡潔でありつつ、情感に訴えかけるものがある。こういうのが読みたくて小説を読んでいるんだよね、と感じてしまう。

ふと思ったのだが、冒頭の引用で語られている「思い出」はここか文章にも通ずるものがある。喜ばしい思い出を反芻して感傷に浸るように、よい文章を読み返す。「朝めし」は評者にとって、そんな作品だ。（荒砥）

（四一四頁 税込一六五〇円 3月刊）

チボー家の人々「新版」1

灰色のノート

ロジェ・マルタン・デュ・ガール著

山内義雄訳 白水社



第一巻が出た。白黒の書影で大変申し訳ないのだが、この本、黄色のカバーがかかっている。それがますこの復刊の素晴らしいところ。なぜか？ それにはますもう一冊の本を読んでもらわなくてはならない。高野文子の漫画、『黄色い本』。この漫画は高度

成長期の日本の女の子が、二〇世紀初頭のフランスを舞台にした『チボー家の人々』を読む、端的に言ってしまうとそれだけを描いているのだけれど、しかし、その女の子は何にもまして『チボー家』に没頭している。障子で畳で、フランスのブルジョアの暮らしとはあまりにかけ離れている。周囲にはそもそも海外文学、いや、小説を読んでいる人もいなさそうに見える。その子は高校を出てすぐメリヤス生地を作る会社就職する。そういう時代なのだ。でも、それはぜんぜん大事なことじゃない。この子は主人公のジャックとともに、政教分離、労働争議、第一次世界大戦を、第三共和制後期のフランスを揺るがした大事件を、切実に生きている。それが大事なことだ。「命をかけてきみのものになる」というジャック・チボーの言葉は、実はこの子の気持ちでもあるだろう。で、実地子を読んでいる『チボー家』が、黄色い装丁なのだ。しかし、僕もそんなふうに小説を読んだことがあった。しばらく忘れていた気がする。でも、この黄色い本なら、主人公と一緒に生きるようなことも不可能ではない気がする。なにせ前例がある。第一巻が出て、これから順に第十巻まで順に出てゆくから、今読み始めるのが一番良いと思う。（コーク）

（二〇〇頁 税込一五四〇円 5月刊）

モンキーハンティング

増田友也著
宝島社文庫

人類は古くから動物と共存してきた。

現代においては、人

間の数が増えるにつ



れ、野生動物の数は減少している。また、住処を追われた動物が人間を襲う事故も発生している。この状況に対し、人類は生物多様性や生態系保全のために野生動物保護を実施してきた。しかし、現代社会における人間と動物の共存のあり方については再考する必要がある、今日では喫緊の問題とされている。

本書は主に日本猿の生態調査を行う東京農業大学の調査隊と鴨猟のために入山した父誠一郎とその息子英輔が主な登場人物である。

彼らが八五〇頭の猿からいかに逃げ切るのかを本書では描いている。舞台は山に囲まれ人がほぼ存在しない限界集落だ。『第5回このミステリーがすごい!』大賞優秀賞を受賞しており、登場人物たちの背景や心情描写もさることながら緊迫感、予測不可能性、急展開の連続が評者を惹きつけて離さなかった。また、本書は単なるサバイバル小説に留まらな

い点が魅力的だ。人間はしばしば自然を管理する側の存在として認識されるが、本書ではその立場が逆転する。物語が進むにつれて圧倒的な数の日本猿に追い詰められる人間たちの姿が描かれ、その様子を至極詳細に描き出しており、読者に強い臨場感を与える。

本書はスリリングなエンターテインメント作品として楽しめる。これに留まらず、動物がもつ本能的な脅威を体感できる。そして、人間と野生動物の共存という現代社会が抱える問題についても考えさせられる作品である。

(二八六頁 税込八五〇円 3月刊)
(投稿・まさぼー)

ダクダデイラ

餅屋蛾著
KADOKAWA

「ネット上で見つけた怪文書をまとめました」と書かれた帯、



濁唾瀾瀾という耳馴れぬ書名、やたらに爽やかな水色の表紙……

四月末に刊行され、今も全国各地で品薄が相次ぐ本作は、昨今流行りのモキュメンタリー(実録映像を模倣した創作)ホラーの手法を小

説に応用した、餅屋蛾のデビュー作である。

昨今の国産ホラーでは、ホラー作家が自らの方法論を詳しく語る機会が増えた(例えば『ジャパン・ホラーの現在地』)。いかに恐怖を演出する(べき)か、あるいは恐怖とはどのように表象される(べきな)のか。モキュメンタリーホラーも例外ではなく、作家自身が恐怖映像をいかに偶然撮れてしまったかのように演出するかを表立って解説するという屈折した事態すら生じている。身も蓋もない話だが、この数年、モキュメンタリーホラーでは技術が最重要となったのだ。

本作の魅力は——意地悪い読み方をすれば——そうした技術がいかになく発揮されていることにあるだろう。実在の様々な事故物件サイトやネット掲示板の縦横無尽な文体模写は、一作目にしてははや達人の域にすら達している。その意味で、なるほど本作は国産ホラーの最新線に位置している——細部まで作り込まれた技術の洗練、という点において。

しかし、この動向には同時に限界をも感じる。現実と創作の間に線を引くために、本当の呪いのビデオ、呪いの文章の実在を遠ざけてしまうのだ。しかし、上述のような技術で、ホラーは説明してしまえるのか。本作を乗り越える新たなホラーが待たれよう。(倉井)

(四〇二頁 税込一九八〇円 4月刊)

「都市計画」の歴史社会学

戦間期東京が描く

近代都市の理想と現実

中川雄大著 青土社



《都市計画》は、その時々私益と公益がせめぎ合う諸条件のなかで折り合いをつけつつ、それでも未来に向けて都市を良くしようとした切実な試みの結晶でもある。

渾身の博論本だ。これでもかという膨大な注と重厚な記述には、新たな知の領野を拓こうとする著者の姿勢が透けて見える。二〇世紀初頭の日本、まさに「都市計画」が導入され始めたその時期には《都市をめぐる根源的な問いが凝縮されている》——そう語る著者は、日本において「都市計画」がいかに普及し、実際の都市空間を形成していったのかを歴史社会学的に辿っていく。

その鍵となるのが《説得的コミュニケーション》だ。《明確な設計図にもとづいて都市空間の建設の完成を目指していく都市改造とは異なり、絶えず変化・拡大を続ける都市空間に対して、それを是正し、介入し続けるというプロセス自体に新たな関心を向ける》——未来という時間軸（planning）に基づい

思考こそが、近代という時代の画期であった。ゆえにその計画にあたっては、未来までを含んだ多元的なアクターを説得し、合意形成を図らねばならない。たとえば爆発的な人口増加と膨張、公害による工場移転、関東大震災からの帝都復興。時間と空間の調整をめぐる格闘の軌跡は、現在にまで連なる都市なるものの相貌を見事に映し出している。

最後に本書とのペアリングとして、最近刊行された京大人環出身の齋藤駿介による博論本、『大仙台』と都市計画 地方都市の近代に描かれた夢』を挙げておこう。（浅煎り）

（五二〇頁 税込四六二〇円 5月刊）

危機の三十年

冷戦後秩序はなぜ崩壊したか

細谷雄一著

新潮選書



今、我々は世界史の転換点に立っている。日々ニュースを

通して、世界が大きく動いていると感じている人は多いだろう。

露米戦争は未だに終わりを迎えず、トランプ大統領は日常的に世界をかき回す。いつから世界はこれほど混沌としてしまったのか？

本書はこの問いに対し、国際政治の歴史から真摯に答えていく。

著者は、戦間期を描いたE.H.カーの名著『危機の二十年』と照らし合わせ、冷戦終結後から今日までの期間を「危機の三十年」と呼ぶ。この時代はユートピア思想が浸透する前半の十五年と、それが後退し、パワー・ポリティクスやナショナリズムを基礎とするリアリズムが復権していく後半の十五年に分けられる。このような大胆な論考を支えるのが、各国の外交アクターの発言と思考を丁寧に吟味する本書の緻密な分析だ。

この二つの思想の衝突について、著者はそもそも国家がそれぞれ異なる志向性と歴史を持つと考える。そのため、一方のユートピア思想が他方からはディストピアに見えることも起きる。冷戦後のアメリカ主導の国際関係の中でロシアは危機感を募らせており、著者は、露米戦争を国際社会がリアリズムを軽視し問題を放置した過去に起因する「冷戦後秩序の産物」と論じる。

戦間期と同じ過ちを繰り返す事実には評者は愕然としたが、第三次世界大戦はまだ起きていない。我々はユートピアとリアリズムを二項対立で捉えず、両者の均衡を模索しなくてはならない。

（投稿：別府）

（二八八頁 税込一九三五四円 2月刊）

繊細さについて

センシビリティとレジリエンスの思想史
スヴェンヤ・フラスペーラー 著
稲葉瑛志／鈴木啓峻訳 郁文堂

フランスの思想家
アレクシ・ド・トク
ヴィルは『アメリカ
のデモクラシー』の
なかでこう主張した――「不平等が社会の共
通の法であるとき、最大の不平等も人の目に
入らない。すべてがほぼ平準化するとき、最
小の不平等に人は傷つく」。つまり社会の平
等化が進めば進むほど、（たとえそれがどれ
だけささいなものであったとしても）残され
た小さな差異への感受性は高まり、人びとは
それに不満を持つようになるのである。



この現象は一般に「トクヴィルのパラドックス」と呼ばれる。これは言い換えれば、社会の平等化は人びとの繊細さの高まりをもたらすということでもある。トクヴィルが先の文章を書いたのは一九世紀中頃。だとすればそれから二百年近くの歳月が過ぎ、不平等の是正が進んだ今、私たちは果たしてどれほど繊細な存在になっているのだろうか。

この繊細さの高まりを受け、それとどう付き合えばいいのかを、ニーチェやレヴィナス、

デリダやバトラーの思想を手がかりに考察したのが本書である。著者の主張は次の一文に尽きる。「良き未来を切り開くのは、強靱さと繊細さが手を取り合うときだけだ」。強靱さの絶対視は「他者の正当な要求をはねつける」ことであり、繊細さの絶対視は「人間を自力では何もできない存在へと矮小化することである。それゆえ著者は、強靱さと繊細さのあいだに活路を見出そうとする。

繊細さを良しとしてそれを愛めるのではなく、その暗い側面にも目を向けること。それはまさに今、要求される態度だろう。（ばや）

（二九六頁 税込二二〇〇円 4月刊）

触発する言葉

言葉・権力・行為体

ジュディス・バトラー 著

竹村和子訳 岩波現代文庫

言葉は傷つける、

そりゃそつだ。しか

し、言葉が「どう」

傷つけるのか問われ

れば、答えに窮さないだろうか。バトラーは

言葉が中傷となる条件を様々な学問分野の議

論を引用しながら探求してゆく。

筆圧のかかった文章、目まぐるしい術語の



羅列はさておいて、話題となる事例を見れば、彼女が何に憤っているかが解るだろう。人種とセクシュアリティに関する発話について、社会権力は「言葉がどう傷つけるのか」に対する見解を巧みに取り替えることで、結果として差別主義に加担してきたのだ。

抵抗の術ならある。言葉はそれ自体で人を傷つけるわけではない。バトラーは、中傷を背後で起動させている隠れた「慣習」の存在を告発する。言葉が中傷性を持つのは、私達がそれを中傷的なものとして繰返し意味づけ直してきたからに他ならない。だからこそ、その使用法を意図的に「ずらす」ことで攪乱もまた可能になるのだ。

『ジェンダー・トラブル』で知られるバトラーは、構造や普遍性から脱するための思考法を一貫して模索してきた。本書は同じ課題に「言葉」という切り口でタックルしたものだ。三年後に出版される『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』では、共著者であるスラヴォイ・ジジェクと「普遍性」をめぐる激しい論戦を繰り広げている。つまり、現代思想の竜虎がここで相博したのである。本書「触発する言葉」を読めば、その直前に彼女が自身の政治思想をいかに練り上げたかを知ることが出来るだろう。

（二七八頁 税込一八三七円 3月刊）

（投稿・花瓶）

バラバラな世界で共に生きる
リチャード・ローティの哲学

朱喜哲著 NHK出版新書

一言でまとめると、「私たち自身と私たちが営む社会を考えるためには、どことどこがいかに決定的に大切なのだ」ということを説明しているのが本書である。

本書の元となる議論を提唱したリチャード・ローティは、二〇世紀後半の哲学者だ。生前には評価されなかった彼の考えは、近年また再評価されるようになる。その理由は、今までの哲学が前提としてきた「心理」や「本質」なるものを否定（そんなものはないし、求めるべきではない）し、「正しさ」や「揺るがない足元」がない中でどうにか共に生きていかなければならないという事実しかない、と主張しているためである。

これには連帯——「相手のことばに自分を委ねたり、時には手を携えたり、せめてお互いに降りかかる苦しみや痛みについて、それとりのぞかれるように願えること」が必要だ、という。従来の哲学のように我々を分断する方法になり得ることばづかいについて議論するべき、という考えを提唱する。（ブラチ）

（二三四頁 税込二〇二三元 5月刊）

マイルス・デイヴィス
研究入門

小室敬幸著 星海社新書

馴染みのない読者が大半だと思うのですが説明しよう。マイルス・デイヴィスはモダンジャズの帝王と称されたトランペット奏者で、帝王の名にふさわしく、二〇世紀後半のジャズの新しい可能性を次々と切り拓いていった。今年はマイルスの生誕百周年ということで、関連する音盤や書籍が毎月のように出ている。本書もそんなマイルス関連本の一冊。

著者はマイルスで音楽学の修士号を取得した真正正銘のマイルス研究家。一〇〇以上の関連楽曲を豊富な図解とともに分析し、そのスタイルの変遷を追う本書は、もはや新書の体裁を借りた専門書の観さである。マイルスが画期的だったのは、コード進行のない音楽のあり方（^{モード}魔法という）を追求したからだ。一般に言われる。その魔法の探求のプロセスを、本書は微に入り細を穿てて跡づけていく。マイルスのスタイルは年代ごとの変化が非常に激しく、その捉え難さが評者は苦手だったが、今やどっぷりマイルスにハマってしまった。ちなみに評者のお気に入りには『マイルス・イン・ヨーロッパ』（六四年）。（倉井）

（三七六頁 税込一八七〇円 5月刊）

明六社

河野有理著
中公新書

明六社とは、森有礼が発起人となって明治六年に設立された学術団体である。本書は、啓蒙的役割や福沢諭吉の活躍が取り上げられがちな明六社の実態を捉え直すものだ。

著者は『明六雑誌』に掲載された論説を読み解きながら、国家、宗教、議会、演説、翻訳といった多様なテーマを通じて、明六社の各人が構想していた社会を明らかにする。本書の特徴は、明六社の構成員を単なる近代化の推進者として描くのではなく、それぞれに幕末以来の経験や挫折を抱えた人物として描いている点にある。たとえば、佐野藩の要職にあった西村茂樹は、「文明開化」の未来を見据えながらも、自分が育った藩に生きる人々を守ろうとしたということ。あるいは、儒者であった坂谷素が、遅れて明六社に入会しながらも、対立する意見の中に「正理公道」という共通の目標を見出し合意を諦めなかったということ。

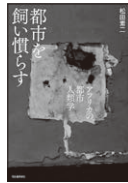
本書を読むと、彼らが思想ではなく、異なる立場のまま議論を続けようとする姿勢を共有していたことが見えてくる。（波見戸）

（二七三頁 税込一一五五円 2月刊）

脈打つ都市の生

都市は鼓動している。高層ビルが建ち並び、直線的な道路が張り巡らされる、その無機質な構造物の集積のなかでも、夥しい人間の生は蠢き、都市そのものの命を繋いでいる。こうした都市の血生臭さにどうしようもなく魅かれてしまうのは、この本のせいだろう。

『都市を飼い慣らす』（河出書房新社）は、刊行から三〇年にして既に古典の域に達する不朽のエスノグラフィだ。長らく絶版状態が続いていたが、待望の復刊を果たした。本書の舞台はケニアの首都ナイロビ——豊かな都市生活という強烈な光を放って出稼ぎ民をおびき寄せては、劣悪な労働・居住環境や警察による暴力といった闇の世界に彼らを陥れ労働力を搾り取る、食虫植物のような都市だ。



著者の松田はナイロビ近郊の出稼ぎ民の町カンゲミに居を構え、生活世界に身を投じた。見えてきたのは「圧倒的に優位な力に支配され押し付けられた生を生きる人々の、創造と抵抗の可能性」だ。知り合いの家に突然転がりこみ、苦境をしのぎながら情報を共有する「押しかけ」、雇い主に「無邪気で鈍重なアフリカ人」を演じてみせる処世術、故郷から切り離された都市での死に備え、金を積み立てる互助講——支配の構造と正対するのではなく、生活の便宜に合わせる内側から再構築していく。松田はこの営みを「都市の飼い慣らし」と呼ぶ。

本書から三〇年、生ける都市ナイロビはその盛りを迎えている。中間層が勃興し、かつて白人富裕層が享受していたライフスタイルを引き継いでいる。しかし同時に、本書の登場人物の多くは未だ

「繁栄を謳歌するケニアの富の分け前を享受する立場にはない」。

気鋭の人類学者・西尾善太が『人間の都市』（花伝社）で描くフィリピン・マニラもまた、分断を孕む都市だ。だが西尾の眼差しは分断ではなく、その裂け目を縫い合わせるながら生きる人間に向かう。



主役は、マニラを血液のように循環する乗り合いバス・ジープニーを駆る「おっちゃん」たちだ。彼らは戦後の廃墟のなかで軍払い下げのジープを改造し、インフォーマルな公共交通を自前でつくり上げた。運行権を買い、ドライバーは自己裁量で走る。渋滞を読み、乗客と交感し、街の流れに身を委ねる。富裕層の居住区とスラムを、オフィス街と市場を、ジープニーは貫いていく。

西尾はこの生を二つの様式で捉える。より良い生を求めてやまない情動と、その生を可能にする場所をまわりの人間と共につくり出す実践。前者が個の欲望であるとすれば、後者はその欲望を都市という場に根付かせる共同性だ。ジープニーの車体に描かれた家族の肖像や夢、街全体を巻き込んだアラガ（メンテナンス）の実践——これらすべてが、生の場所を織り成す。「汗が、オイルが、傷み、滴り、輝く」。その身体的な記述は、都市が人間の肉体と欲望と関係性から日々紡がれることを体感させる。

支配の網の目を食い破り、人々は執拗に生の場所をつくり続けてきた。その人間臭さが今日も、都市を鼓動させている。（たいやき）

久生十蘭を語る

「言葉の魔術師」と称されるだけあって、独特の漢語を交えた彼の軽妙洒脱な文体は、ひとたびその味を知ってしまったら、もはや並の作家の日本語では満足できない。その文体があればこそ「母子像」や「黄泉から」といった夢想的傑作が生み出されたのは言うまでもないが、しかるに十蘭の味がそれに尽きるといってはあまりに惜しい。なんとすれば、彼の紡ぐ言葉の切れ味は、ユーモア作品においてその真価を發揮するのである。

たとえば、戦間期の巴里を舞台に、氣随奔放な三人の日本人令嬢のノンシャラン生活を描いた「花束町一番地」。巴里で暮らしていた彼女らは初対面から因縁を吹っ掛けあい、衆人環視のなか目も当てられぬ白兵戦。寝泊まりしていたアトリエに誰かが男を連れこみ、うち一人が大激怒。それから三人で居住を移し、それぞれ男（アミ）を引っかける……その描写の逐一が、十蘭特有の茶化したような軽い文体で運ばれる。最大の魅力は、機知と諧謔が留まるところを知らぬ人物描写の冴えわたりよう。真上の階に住んでいた老女の描写を例に挙げよう。《お嬢さんはお嬢さんでもその上に老のつくお嬢さん。体液が乏しくなって、まさに半硬化状態に入ろうとしている。（…）人間齡をとると角がとれて丸くなるというが、このお嬢さんの方は反対にだんだん角が多くなるらしい。梭魚のように痩せた身体は多角形にワンピースを突っ張らせ、顎も三角なら目も三角、その上言葉つきまで棘々して何でもないことに角が立つ。（…）花ならば鬼薔とでも言うべきこんな刺々しい花が一本花束の中に紛れ込んだ》。



もちろん、文体だけではない。愛国精神に燃える仏蘭西人の奮戦を面白おかしく描いた「フランス感^カれたり」という作品がある。各国の外国人が滞在していた世界の縮図のごとき軽井沢で孤軍奮闘、ペロオさんの民族運動が炸裂する。時代設定は第二次大戦期、巴里が陥落した直後である。彼はホテルのロビーで英吉利人に冷笑を見せ、陰気な顔をして観光団をつけ回し、会話を盗み聞きして他の人たちの夕飯の食材を買い占める。挙句、国籍さまざまな家々の表札を出鱈目に付け替えて、ソ連も英吉利も独逸も、ませこぜにしてしまつ。《要するに、ペロオさんは世界の秩序を混乱に陥れはじめたのだ、たった一人のペロオさんが！》。なんとこの皮肉であろうか。

また、十蘭は人間の認識をプロットに組み込むのが異様に巧い。「田舎だより」は、片田舎のとある村にアメリカの進駐軍が来るという、村総出で、んわんや準備に励む話である。なぜかといえは、村人たちは訝しむことなく途端にアメリカにかぶれた。独り歩きした現実の「取り違え」と、それに翻弄される人びとの滑稽さ。そこには十蘭の、人間存在に対する透徹した眼差しがある。

思えばミステリ長編『魔都』にしても、卑しい一介の新聞記者と安南皇帝が間違われるところから事が始まるのだから、幻想的でありながら喜劇としての性格が強い。こうしたユーモア作品が単なる滑稽劇に収まらないのは、作家の比類ない言語感覚と、計算されたプロットの妙であろうか。幻想とエスプリを自在に操る小説の名医。それこそが私のこよなく愛する作家、久生十蘭である。（猫足）

編集後記

はじめまして。先月号から綴葉の編集委員に加わりました時間です。前期ももう終わろうとしています、大学生・大学院生という自ら時間を設計しなければならない皆さんは新しい生活スタイルを確立できましたか？

新たに綴葉を成り立たせる一端を担い始めたわけですが、他の編集委員の皆さんは毎度どっしりとした、時には飄々と、ユニークな書評を書かれるのに、まだまだペーペーな私は文章に厚みを持たせることができず苦戦しています。文章の重み厚みは人間性のそれと重なるのでしょうか。それなら生き方を考え直さないといけない時なのかもしれませんね。

加えて、他愛ないことをつらつらと書くことは好きなのですが、何かを伝えるために論理立てて文章を書くことが苦手なたちでもあります。院生としては致命的ですね。それでも文章を書くということ自体はとても好きなので（文章を書くために院生でいると言っても過言ではありません）綴葉に誘っていただいたことをとても感謝しています。なので参加したての今は、気取らず構えず自分が本当に好きな本を題材に、素敵だぞ！という感情を素直に表現する文章を書くことにしています。皆さんの止まり木のような文章になれたらと思います。

（時間）

当てよう！図書カード

「ポッコちゃん」や「おーい でてこい」といったオチのある短い作品——いわゆるショートショート作品——で知られる星新一ですが、ある文豪が彼の大叔父にあたります。それは次のうち誰でしょう。

1. 森鴎外
2. 谷崎潤一郎
3. 夏目漱石
4. 宮沢賢治

（時間）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは8月15日です。



《4月号の解答》 4月号の問題の正解は、2. の『上海』でした。諸国の権益がぶつかり合うこの魔都を舞台にした『上海』は、文章表現の妙だけでなく、ストーリーテリングも魅力です。図書カードの当選者は、いぐあらしさん、森さん、てんとう虫さん、たまこさん、えび天天さんの5名です。当選おめでとうございます。

（コーク）

読者がらひゅう

○梅雨ですね

（大学院・たくあん）

——ついにやってきてしまいましたよこの季節が。暑さと湿度でやる気が起きず、自転車にも乗れないので異常に不便。やってられません。とはいえ、除湿を最強にして、雨の音を聞きながら本を読むのは好きですが……

○十八禁。攻めた企画、ナイスです

（理・えび天天）

——ありがとうございます！執筆者の一人としてとても嬉しいです。僕は『ユリシイズ』に関する部分を担当しましたが、編集会議の時には他メンバーの原稿を読んで面白いなあと感じていました。インターネットで十八禁に触れ放題の現代からは想像できないほどの情熱が詰まっていますよね。ついでに、ここで関連おすすめ本を紹介させていただきます。『ユリシイズ』出版に際したトラブルや事件、逸話に関しては、『ユリシイズを燃やせ』という本にも扱われておりこちらも興味深いですし、検閲と伏せ字に関しては『論集 蓮實重彦』に収録されている「姦夫と佩剣」も見逃せません。特に後者は大著『ボヴァリー夫人論』への導入として格好のエッセイとなっています。ぜひ。

（コーク）